

へいそくおけい

■曾於市文化財散歩（三）

「十五夜記」

旧暦では七、八、九月が秋で、八月十五日の満月の夜を十五夜と言った。月の満ち欠けは、人々の生活のリズムと深い関わりがあった。特に農村では、収穫期



和田むらの阿弥陀堂（あんだどん）
この広場に土俵を作り活動の拠点にした

と重なるこの夜を農耕儀礼の一つとして、家庭や集落あげて祝ったものである。

さて、筆者が子供の頃の十五夜は、部落（集落）のイベントとして、小学生が主役となつて盛大に実施されたものである。

十五夜の日が近づく、団長（かした）の指示に従い、先ずは土俵をつくるわけであるが、大人の手をからずに子供たちがだけで、むかしながらの簡易な土俵（どひゅ）をつくりあげた。それから当日まで、毎夜相撲の稽古が始まるのである。かしらの吹く法螺貝（け）の合図で、夕食を済ませた子供たちが参集し、焚火で明かりをとり、諸々

の対戦・番付を考えて楽しく賑やかに過ごしたものである。時には近隣の部落に遠征し、熱の入った対抗戦に臨んだ。

土日や下校時の昼間には手車（しゃれつ）を引いて、綱用の稲藁を貰いに各家庭を巡回したり、葛の蔓（かんねんかずら）や焚火用の焚き物（たつむん）採りに出かけた。

当日は青年団の加勢を貰つて綱作り（つなかつ）である。長木（ながつ）で綱櫓を組み、高所の横木に綱を掛け、三人がそれぞれに藁に縊（よ）りを懸けた束をしつかり掴（つか）み、

芯にかんねんかずらを入れて、踊るように回転しながら調子を合わせてリズムカルに綱（な）をひいていく。子供たちは出来た分ずつ綱をひっぱっていくわけ、全体のタイミングの取り方が面白いのである。出来上がった綱は円形に巻き上げ、頭部を竜が吼えている姿に形作り、月の昇る方角に向け、長い竹筒にすすきや萩を飾り付けて出番に備えた。

夕方、子供たちは貝（け）を吹き鳴らしながら、集落全域を巡回して「今夜ですよ」と合図

を送る。月が出て明るくなる頃、人も賑やかに相撲大会も弾みが付き、東西対抗戦・三人抜き・五人抜きと熱の入った取組に湧きかえる。飛び入りで青年・大人の迫力ある対戦も披露された。満月が高々とあがり屋間のような明るさになると十五夜の綱引き（じゅごやんつなひつ）である。地区別対抗・多勢の子供対大人など組合せを工夫して心行くまで力をためたものだ。

十五夜綱の藁で編む草履（ぞい）・鍋敷き（なべすけ）・（はがまとい）は縁起がよいという習わしがあり、綱引きのあとは藁細工に大人たちは精だしたものであった。

当夜は各家庭でも木臼に箕を置き、一升瓶にすすき・萩・いが栗の枝を差し、いもや団子（だご）を十五夜様（じゅうごやさあ）へ供えた。

十五夜は各部落の習わしや伝統が継承され盛大に執り行われた行事であったが、段々がたを変えたり減少していくことは寂しい限りである。

（市文化財保護審議会委員
稲留 明）